



第9部 ゆく際、くる人③

利休の「菊炭」育む里山

真田に近い切り口の中心から、外側の樹皮に向かつて放射状に割れ目が走る。「断面がキクの花に似ているから『菊炭』と兵庫県の東端、川西市黒川で炭を焼く今西学さん(47)。茶道

用の最高級炭で、茶聖・千利休も愛用した。近くで茶道や陶芸をたしなむ澤田博之さん(65)は「見た目や火の付き、持ちが良く、はぜにくい」。

原料は里山で育ったクヌギ。黒川周辺は良質な産地だ。切り株から発芽し、約10年で炭に適した太さに成長する。山を10区画ほどに分け、年に1カ所ずつ交代で「輪伐」してきた。

切った年の異なる林がパッチワーク状に広がる景観は全国で見られた。「今は黒川ぐらいいしか残っていない。『日本一の里山』と呼ぶに値する」と兵庫県立大学の服部保名誉教授(70)。

数十軒あった炭の生産家も、今西さんだけに。燃料の転換や高齢化で放置林が増え、「日本一」は瀬戸際に立つ。(佐伯竜一)

創刊20周年 神戸新聞



菊炭。特に良質なものが茶席で使われた

川西市黒川(撮影・大山伸一郎)

3面に続く



(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

名前【 】

① 「菊炭」と呼ばれるのはなぜでしょう。

② 「菊炭」の原料になる木はなんですか。

③ 「輪伐」とはどんなことですか。記事を参考にして説明してください。

④ 『日本一の里山』と呼ぶにふさわしい黒川の里山が瀬戸際に立っているのはどんな理由からでしょうか。